

たが、入田への道が道路工事中で、迂回せねばならないと聞いて、あきらめて帰途についた。

竹田一犬飼間は、鎧装も完了していて車は快く走る。しかし犬飼に着いた時は、暮色ようゆくせまうて、長い夏の日も暮れかける。

こうして九時前に無事帰宅した。強行軍であつたが有意義で、楽しい一日であつた。

私は近來人にすすめ、自分でしようと思つてゐる。それは再遊のことである。二回目とは二回目ではない、三遊、四遊また可なりである。

今回の旅は、前回と反対に巡つた関係もあるが、前回の印象を訂正し、前回見落したことを、改めて認識したことが多かつた。

しかし高千穂について言えば、国見が丘、高天原、高千穂陣などをまた見ていない。これで日何回行つても見落しが出まうてゐる。

再遊を念じ、再遊をすすめる所以である。

(おわり)

(明・三三) ◇豊国史談(明三五) ◇豊後史蹟考(明三八)

◇大分県会史編纂(明・三九) ◇豊国小史(明四〇) ◇大分

県新刊沿革史(明四一) ◇佐伯志脱稿(明四二) ◇馬城峯

拳兵史記(明四四) ◇別府新史(大正元) ◇松平忠直謫居

録(大正元) ◇宇佐神宮記(大正四) ◇大分県管内全史(大正五)

◇宇目郷史(大正六) ◇臼井新史(大正六)

◇大分県警察官遭難殉職記(大正九) ◇南海郡郡史(大正一〇年)

◇根島史(大正一〇) ◇西国東郡史(大正一二) ◇大分

県被贈位者小伝(大正十四)

(以上)

随想

佐藤鶴谷翁と私

会員 佐 脇 貫 一

私が鶴谷翁を訪れて、佐伯の話聞き、郷土史に興味を持つようになったのは、昭和のはじめであつた。そのころ先夫人おこと小母さんを亡くされた翁は独り住まい、淋しさを酒と著述でまぎらしていた。

それだけに、若い私の訪れを喜び、私を相手に、翁は冷たい佐伯人の態度を非難したが、また矢野龍溪や藤田鳴鶴が佐伯人だったのであるに振られたか、明治・大正の政界人と佐伯の関係など、体験を通じて知つた佐伯人根性と時代相を、つぶさに語ってくれた。

私が最初に翁を訪れたとき、翁は手許におつた漢籍ととりあげ、はじめ夏をめぐつて讀んで見よといつた。それは孟子で、梁惠王篇であつたから、私は躊躇なく読むことができたが、翁は笑ひながら学習と文章について語り、文学青年を以て任じていた私を啓発してくれた。

ある日翁を訪れた私は、机の上に薄い冊子がひらげてあるのを見た。「先生何ですか」というと、「うんお為半蔵の口説だよ。知つてゐる古老が死んでしまつて、元の形がわからないのじや」と答えたが、やがて机を引出しから自扇をとり出すと、筆に墨をふくませて、在天連理枝、在地比翼鳥々と横書きし私にくれたが、しばらく瞑目して「ああ婆さんが生きていたらなあ」とつぶやいた。見ると翁は目に涙をたたえ、一入淋しそな様子であつた。

おまち小母さんが佐藤家に入つたのはそれから間もなく

くであつた。郷土史家で老新聞人佐藤鶴谷を敬愛していた佐伯新報主幹柴田南華氏らが、独り居の翁を見かねて再婚の世話をしたという。

それは冬のある日、例によつて鶴谷翁を訪れると、翁は戯嫌のよい声で「おまちさん、貴さんが来たよ」という。小母さんは「ハイ、ハイ」と答えたが、しばらくしてお銚子が出た。何事があつたのか知らないが、翁はすでに下地があつたやうで、誰か客のあるのを待ちまうけていたのだつた。そうした翁の雅氣を微笑みながら温かく見守る「おまち小母さん」、私はたゞ数か月前の淋しい翁の生活を思い返すのだった。

また、ある日、翁の書齋で話しこんでいたとき、「郵便」という声、玄関に出ていったおまち小母さんは、一通の親書をもつて来て翁に渡した。封筒の文字を見た翁は突然「犬養からじや」と叫んで、封を切り長々と巻紙に書かれた便りをむさばるやうに讀んだ。そしてハラハラと涙をこぼしながら「宰相にもなるうか」という犬養が故郷にひつそくしている昔の友を忘れずに、よくも便りしてくれたものだ」と感激した。

そのころ、私はよく翁のお供をして、津久見・丹賀などに行つたが、それは元氣だとはいへ、足のおるい翁を案じる、おまち小母さんのやさしい心ゆりであつた。

昭和六年のある日、翁は私の前に一冊の写本を置いた。「梅牟礼実録」とある。歴史には興味をもつていたが、郷土史の何んたるかを適確につかんでいなかった私は、梅牟礼実録の価値はあからなかつたが、それが唯一の佐伯氏伝承であることを聞くと、これを写しとりたいという欲望にかられた。私はその写本を借り出して、友人の大亀忠彦に相談した。そして翌七年七月、ガリ版刷りの「梅牟礼実録」が、大亀表の睦美書房から出版された。

鶴谷・佐藤蔵太郎翁は、安政二年七月十日、佐伯城下

下中島町に生れた純粋の佐伯人である。父佐藤源祿氏は佐伯藩の簡え足輕で六石二人扶持という、いたつて低い身分であつたが、子女の教育には熱心な人であつた。こうした嚴父の期待に応えるやうに、蔵太郎少年はまれに見る穎才、漢学塾に通うや、衆を抜いてその師を驚かせたという。

翁は実名を盛卿、字を子晩といい、蔵太郎は通称であつた。もつとも明治五年の戸籍法施行以後は、蔵太郎を主戸籍名とし実名や字はほとんど用いることがなかつたが、号や筆名(ペンネーム)は多かつた。鶴谷と号したのは新聞人として活躍したころで、明治十七年刊行して、いわゆる洛陽の紙栖を高くしめたという小説「悲雨慘風世路日記」の筆名は菊亭香水、これは小説家としての菊亭主人、雅文家としての忘山香水を合せて二で割つたものである。

翁が明治八年九月、大分県師範学校伝習所を卒業、鶴谷女学校の教員をし、明治十三年六月、自由民権運動に参画する政治結社、青年久敬社を組織してその社長に推され、青年たちのリーダーになつたことはよく知られてゐる。

明治十四年九月、黄漢矢野文雄先生の知遇をうけて東京に伴われ、郵便報知新聞に入社したが、翁の新聞生活はここにはじまり、大正元年郷里佐伯に帰って、専心史筆をとるやうになるまで、約三十年間続いた。

このやうに書き綴つていくと、鶴谷翁の思い出はつきないが、その史筆のおとをふりかえつてこの稿を終ることにしよう。

◇西南追討五月兩日記(明・二〇) ◇大友外伝不知異聞

(以下三ページ上段下)